別紙２

論文審査の結果の要旨

氏名　田辺夕美子

田辺夕美子さんの論文（英文）、『Body, Self and Agency of Women in Contemporary Orissa, India（現代インド・オリッサにおける女性の身体・セルフ・エージェンシー）』は、インド・オリッサ州、プリ（Puri）行政区の現代女性が、農村（Garh Manitri 村）、また都市（Bhubaneswar 市）の、文化・社会的に規定された枠組みの中で、いかに行為主体性（エージェンシー）を発揮しているか、また現在の社会的状況の中でどのような制限を受けているかを、行為主体としての女性の身体的基盤と、自己（セルフ）との構成との関連において検討している。調査は１９９３年３月から１９９５年３月の間に、合計１４ケ月間行われた。

本論文は、第一章で、女性の行為主体性を検討するための、「自己反省的な身体＝人格」(self-reflexive body-person)という概念を導入する。身体は食や性の物質的・社会的交換において構築される。そこにおいて身体は個的な性格とともに、他との連関的性質を有する。そうした身体が自己反省的であるというのは、個が、自らを関係性の中にある結節点として認識し、文化と社会の規範の中で、他者との関係性をすでに内包した存在として自己を反省的に対象化していることを指す。

第２章では村の空間的配置とそこにおけるジェンダー区分の意味について論じる。オリッサ村落におけるジェンダーによる領域分離には、ウチ (ghara) とソト (bahara)の区別がある。ウチは主に家の中を指し、女性の活動領域であるとされるのに対して、ソトは状況に応じて家の外または村の外を指し，男性の活動領域であるとされる。こうしたウチとソトという空間の区分の枠組みは、単なる宇宙論的な枠組みではなく、植民地経験とその後のポスト植民地的状況のなかで新たな意味付けが付与されたことに注目する必要がある。単純化して言えば、ウチとソトという二分法は近代と伝統の二分法に重ね合わされたのである。さらに女／男というジェンダー区分が伝統／近代という時間認識と内／外という空間認識に重ねあわされた。このような植民地的二分法において、ソトにおいて変化する近代に対して対応していくべき男性に対して、女性はウチにおいて伝統を保持するものとしての役割を担うべきこととされたのである。しかし、このことはたんに女性が、そうした役割に盲従するよう押しつけられた、というのではない。女性たちは日常の家事や交換、儀礼といった生活文化の中で、表面的には反復的に見えても、実際は意識的にそれを取り返し（self-reflexive）行為することで、自分たちのアイデンティティを構築している。

このことを、第３章では、女性の身体＝人格が人生儀礼のなかの交換関係をつうじて、いかに構築されているかを探ることによって、検討される。人生儀礼は、ある個体としての女性の社会的・身体

的変化であると同時に、それを契機としてさまざまな相互行為や交換が行われる機会である。そうした交換行為の中で、女性の身体＝人格を中心的な結節点とする、多元的な社会関係の束にも変容が起こるさまに注目する。そこでは、女性とさまざまに関係する多様な人間が、儀礼の過程に直接的または間接的に参加し、種々の贈与交換に関わることによって、彼女を中心とする社会関係の網の目が変容するのであり、それはひいては、そうした網の目を形成している諸身体の変容の過程をも伴うものである。

第４章では、女性の身体が初潮を契機に自らを統御し、また統御される対象となる過程を分析する。初潮儀礼の主人公である少女を中心として形成される関係性の一つとして重要なのは、豊穣性と吉祥性を有する集団としての女性共同体である。こうした女性の豊穣力は、女神として表象される大地の生産力と隠喩的につながるものである。成熟を迎えた少女を中心として、社会的ネットワークが水平的に広がるだけでなく、そうした社会全体の再生産を可能にする大地の女神の生産力と、少女が獲得するに至った豊穣性は、垂直的に照応するのである。これは、女性のライフサイクルと大地の年間サイクルには顕著な平行性がみられ、大地も「初潮」「妊娠」「出産（産出）」のプロセスを経るとされることからも見て取れる。女性の生殖力も大地の豊饒力と同じく、シャクティという女性的な聖なる力の現れであると考えられている。シャクティは女神の別名であり、あらゆる豊饒・生産の源であるとされる。女性の個のセクシュアリティーは、こうした大地の女神との照応関係を通じて、宇宙的な広がりをも獲得するのである。

とは言え、現時点でこの地域において進行していることを見つめれば、伝統の存続の核であり続ける役割を女性たちは担わされることで、コミュニティの一部分であるウチに閉じこめられ、彼女たちが作る集団も、その境界の内側の原理でコントロールされ、彼女たちが持っている可能性としての社会的な主体としての振る舞いや、それが作り出す宇宙的な意味は軽視され、さらには否定される危険がある。しかし、第６章では、そうした伝統の実体的な位置に押し込められ、沈黙させられかねない彼女たちが、逆に自分たちの活動をウチ、具体的には家や裏庭に限定しながらも、共同的な儀礼を行い、食物を交換しあう活動によって、男性たちによる、ソトにおける、「近代」に属する村の派閥政治に、大いなる影響を及ぼすことが描かれている。そうした限定された活動によって、女性たちは、逆説的にエージェンシー、行為の主体性を獲得していることを、本論文は適切な具体例を提示しつつ、卓抜な議論によって明らかにする。

では都市部の女性たちはどうだろう。彼女たちは、近代・伝統の二分法の近代の側に移動して、いわば近代的な主体性を獲得しているのだろうか。当然出て来るであろう、その問いに、本論文は、彼女たちが主体性を獲得していることは間違いないが、単に共同体から自立した個人としてではない、新たなかたちの模索の内にあることを伝える。すなわち、現代インドの地方都市に住む女性たちに

とって、もちろん、村における女性の埋没した生き方は避けるべきであるが、首都におけるような、まったく西洋の近代に同化したかのような考え方や振る舞いも　その行動のモデルたりえない。むしろ彼女たちは、日々の状況の中で自分たちの振るまいが、周囲の眼によって「正しい」あるいは「スマート」として判定されるかどうか、という「美学（aesthetics）」を基準として、新たな、行為に関するパラダイムを作り出そうとしているのである。

このように、それぞれの女性たちが、そのおかれた状況の中で、村落部では伝統の担い手としてウチに閉じこめられながらもソトに働きかけていく有様を、都市部では新たな構造的な規則が無いままに、二分法のはざまを、自らの新しく形成されつつある主体性を意識化しながら生きている現状を、すぐれた記述と分析に基づいて明らかにしている。この点に、本論文の価値の大半は存する。

これらに加えて、第５章のブランコ歌の分析では、女性の聖なるエロスがこの世を相対化する可能性に満ちていることを論ずる。ブランコ歌においては、断片的でとりとめのないイメージの連鎖のなかで、恋愛への淡い憧れや将来の結婚への期待と不安が交差するのがみてとれる。このブランコ遊びは、身体の反復的な揺れによる微かな酩酊状態において、未だ見ぬ「永遠の恋人」との想像上の逢瀬による自己遊離、あるいは自己拡大の過程と理解することができる。ロマンティシズムのなかの「永遠の恋人」との関係は、世界の再生産に結びつく性愛（カーマ）に基づくものではなく、あらゆる規範や権力関係に拘束された身体を超えたエロスに基づくものであるということができよう。ここでエロスとはある現実態に対する欲望ではなく、むしろ現実のかなたに想い描かれる幻想的な「美なるもの」への希求である。その最高の形態は、最高神クリシュナへの愛（プレーム）として表象される。ここには、今後の論者の、新たな研究の展望を予感させるものがある。

また、このような高い評価と共に、審査委員からは、本論文の基本概念である、「自己反省的な身体＝人格」(self-reflexive body-person)は、その斬新さの一面、概念として未だ不明確であること、このオリッサという特定の地域のモノグラフとしてみると、女性たちが持つ個別の困難と、それに向けての意志的な努力の姿に、十分な肉付けがなされていない憾みが残ること、などが指摘された。また、村落部で扱っている対象の女性たちが支配的な高位カーストに属する女性であることから来る、ウチとソトという二分法の枠組みへの、過度の依拠があるのでは、という疑問も出された。しかしながら、上述の概念はこの複雑な状況を解いていくために、より精妙に鍛え上げていくことによって、またモノグラフの記述に関しては、この成果の公表の際に留意すべきこととして、本論文をより良きものとする可能性が示されたものと判断された。また、あるカーストやどちらかの性の視点に依っていることに関しては、伝統的インド社会の現地調査では、完全には避けがたいものであり、本論文の成果をさらに他の研究成果と比較することで、より広いパースペクティブに立つ研究を行うことを要望することとした。